

2025 年 11 月 16 日 降誕前節第 6 主日礼拝メッセージ

「災いの意味を問う」

牛田匡牧師

聖書 マルコによる福音書 13 章 3-13 節

「世も末」という言葉があります。「世界の終わり」を表わす言葉で、そこから転じて「救い難いような現実世界」という意味でも使われたりしますが、もとは仏教の末法思想から出ている言葉なのだそうです。確かに、今も世界中で戦争が続けられています。2 年間に亘って爆撃が続けられたパレスチナのガザ地区では、先月から停戦が行われているとはいえ、町並みはすべて破壊し尽くされ、もはやガレキしか残っていない映像が報じられています。避難を余儀なくされている方々への食料も医薬品の供給も全く間に合っていない窮状が報じられる度に、胸が痛くなります。

一方で、日本の高市新総理も、勇ましいことと言いますか、不用意な発言が続いて、早くも日中関係が怪しくなっています。しかも、彼女は軍拡路線を公言してはばかりませんから、一体彼女の眼の中には何が映っていて、どこに向かって船を進めようとしているのかが分かりません。それこそまさに自滅に向かっていてのではないかとさえ思ってしまう。

そのように「戦争」というものは、私たちに容易に「世界の終わり」というものを感じさせます。ですが、「世界の終わり」を連想させるものは、「戦争」だけでもありません。他にも、例えば、大雨による洪水や、干ばつ、また地震や津波など、様々な自然災害によっても、私たちの作り上げて来た生活や町並みは、あっという間に破壊されます。それらの現実を目の当たりにした時、多くの人が「これから先は、どうなっていくのだろうか」と先行きに不安を感じたり、絶望したりすることもあるのだと思います。今では毎年、様々な地域で災害が起こっていますが、それらを前にして人間一人の力はとことん無力に等しく感じられるのではないのでしょうか。

そのような「世界の終わり」というものを考えるのは、現代の私たちだけに限ったことではなく、世界中で大昔から考えられてきたことだったのだと思います。「この世界はどうやって始まったのだろうか」という問いを、各地の諸民族・諸宗教がそれぞれに考えると同時に、人が生まれ、また死んでいくという現実を眺めながら、「この世界全体はどこに向かっていて、そしてどのように終わるのか」という問いが出てくるのも、自然なことだったのではないかと思います。そしてそれは、聖書の中においても「終末思想」として記されています。

世界には始まりがあったのだから、終わりもある。世界の終わり、終末には現在のこの不完全な世界が終わって、世界が完成されて、完全な世界が実現する。そこにはもう苦しみも悲しみもない（黙示録 21:1-4）。そのように考えられて来ました。それは裏を返せば、たくさんの苦しみや悲しみがあるこの現実世界から、救われたい、という人々の切実な願いや期待から生じたものなのだろうと思います。

今回の聖書のお話は、イエス様が弟子たちに、世界の終わり、終末がやって来る時の「徴」、予兆について告げられた、というお話で、聖書協会共同訳の聖書には「終末の徴」という小見出しが付けられています。そしてまた「マルコによる福音書」だけではなく、「マタイによる福音書」(24 章)や、「ルカによる福音書」(21 章)にも書かれていますので、当時の人々にとっても分かりやすく、記憶に残りやすいお話だったのでしょう。「この世界が終わる時には、どのようなことが起こりますか」という弟子たちの質問に対して、イエス様はまず「私の名を名乗る者が大勢現れ、『私がそれだ』と言って、多くの人を惑わすだろう」(6)と言われました。ここで言われている「私がそれだ」とは、つまり自分が「救世主」「救い主だ」ということです(マタイ 24 章)。世界の歴史を見ている、社会に不安が渦巻き、どうしようもないという閉塞感に満ちた時、ファシズムが台頭しています。そして人々は自分で考えることを放棄して、「私についてきなさい。私が必ずこの窮状から救い出そう。私について来れば大丈夫」と語る者にすがって、独裁者を作り出してしまうのだと思います。そのような人間の口車に乗せられて、惑わされてはいけない、とされています。

続く 7 節では「戦争」が語られ、8 節では「地震」や「飢饉」が語られ、それらは世界の終末、完成に向けての「産みの苦しみの始まりである」と言われています。更に 9 節以降では弟子たちに対して、あなたたちには捕らえられたり、打ち叩かれたりする受難が待ち受けているということも語られています。しかし、それでも最後の 13 節にあるように、たとえ「すべての人に憎まれ(敵対したとしても)、最後まで耐え忍ぶ者は救われる」。だから、頑張りなさい、忍耐なさい……。そのようなことがイエス様の語られたこと、弟子たちに伝えたかったことなのではないでしょうか。

世界各地に宣教に派遣されている宣教師たちの中には、10 節にある「(世界の終末、完成の前には)まず、福音がすべての民族に宣べ伝えられねばならない」という言葉を重く受け止めている人たちがいます。つまり、世界中の全ての人々に、キリスト教が告げ知らされてから、初めて世界が完成される時が来る。それまでには戦争も地震も飢饉も、迫害もあるが、それらを乗り越えて、とにかく世界宣教に

勤しむのだ、というような理解です。そのような理解をする人たちにとっては、今の苦しい世界の現状も、戦争も、地震も飢饉も、世界の完成、終末、救済のためのステップ（段階）、一つの通過点に過ぎず、たとえ今が苦しくても、それは「産みの苦しみ」で、後でもっとすばらしい天の国が完成するから、今の苦しみには目をつおって、頑張ろう、忍耐しよう、となるのだらうと思いますが、本当にそうなのでしょうか。ファンダメンタリスト（原理主義者）になると、それこそ現在のイスラエル国で戦争が行われていることは、この聖書の言葉にも裏付けられている正しい必要なことであり、これらの戦争によって、世界は救いと完成に向かっているというような曲解までなされているようです。

今年も、来月にはもうクリスマスがやってきます。2000 年前のガリラヤに、辺境の地の貧しい家畜小屋に、世の底辺に寝かされていた無力な赤ちゃんとして生まれた救い主が、一転して、人々の上に立つ強大な権力を持った独裁者として、「将来の栄光のために、今は苦しくても我慢なさい。将来の救いのために、今の苦しみや破壊があるのだ」と命じているとはどうしても思えません。今回のお話も、聖書の原文を改めて眺めてみると、歴史の中を生きられたイエス様が伝えられたことは、むしろ別のことだったのではないかということが分かります。

まず 7 節「戦争は必ず起こる」ですが、そのように読むと、まるで戦争が必要悪であるかのように誤解してしまいましたが、正しくは「戦争というものは、望まなくても繰り返し起こってしまうものだ」というような意味であり、大切なのはむしろ「まだ世の終わりではない」という言葉です。そして続く 8 節の「産みの苦しみ」という言葉も、そのように読むと「戦争や民族対立も、地震も飢饉も、救いに至るための必要悪。不可避の苦しみ」と誤解しそうになりますが、むしろ字の通りの「出産の苦しみ」ではなく、「出産の苦しみのように大きな苦しみ」という一つのたとえの表現だと考える方が適していると思います。ですから、「様々な苦しみ、とても大きな苦しみがあるけれども、しかし、まだ世の終わりではない」ということです。

その後の 9 節 10 節では、「あなたがたは地方法院に引き渡され、会堂で打ち叩かれる」という迫害の予告をした後に「また、私のために総督や王の前に立たされて、証しをすることになる。こうして、まず、福音がすべての民族に宣べ伝えられねばならない」と述べられています。そして、ここでは総督や王の前で「証言をさせられる」と訳されていますが、これはむしろ「（あなたがたは）私のために総督や王の前に立たされるだろう」で、一旦区切り、続けて「それは（彼らに対する）証のため、また全ての民族に対する証のためである。なぜなら、まず福音が（あなたが

たの身をもって示され) 宣べ伝えられなければならないからだ」(田川建三訳、マタイ 24:14)と訳す方が適していると思います。だからこそ「(敵対者たちによって)連れて行かれ、引き渡されたとき、何を言おうかと心配してはならない。その時には、あなたがたに示されることを話せばよい。話すのはあなたがたではなく、聖霊なのだ」(11)と続けられているのだと思います。

以上のことから、イエス様が本当に伝えられたことは、「人々に惑わされるな。扇動者や天変地異に惑わされるな。戦争や地震や飢饉など、様々な苦難、災いがあるが、まだ世の終わりではない」。つまり、それらは「世の終わりの徴ではない」ということだったのだらうと思います。私たちが生きている限り、時々遭遇する様々な災い……。それらの意味を、「聖書にこう書いてある」「イエス様がこう言われた」と言って権威づけて、人々に強要する時、それはイエス様が語られた「私の名を名乗る者」、イエス様の名を語る偽預言者と同じになってしまっているのではないのでしょうか。

聖書が天地創造の物語から一貫して表わしていることは、創られた全ての命が尊く、大切だということです。そしてイエス様がその身をもって、その誕生から十字架上で死と復活までの生き様を通して示された「福音」とは、いつでもどこでも、たとえどんなに絶望的な状況の中にあっても、神が共におられる(インマヌエル)ということ、神があなたを見捨てることはないということです。

災いの意味、苦難の意味、それらは私たち一人一人が、その人生の歩みの折々に、何度も問いかけ、問い直し、意味を紡ぎ出していくもの。そしてこれまでの過去の経験を生き直していくものです。決して他人から教え込まれたり、指示されたり、決めつけられたりするものではありません。それぞれの方の生涯の歩みにおいて、いつ、どのように神様が共にいて働かれたか、その力を感じたかは、それこそ自分で考えて話すものではなく、共におられる聖霊が示されて語らせるものなのかもしれません。

ますます戦争に向かってキナ臭くなっている今日、私たちの周りには目を惑わすものや、不安をかき立てるものが多くありますが、そのような中にあっても、それらに惑わされることなく、神様がどこにおられるか。誰と共におられるか。そして私たちはどのように生きるかということに、目と心を絶えず向けていきたいと願います。災いの意味、現実の意味は、一人一人が神様と共に歩む中で、日々に見出していくものです。